

次に纖維素質人織に捲縮性並にスケール様外觀を與ふる爲の研究は羊毛代用を主目的とするもので、これが爲に二浴式紡績法を用ひて第一浴の濃度を少くするとか、或は又紡績後のヴィスコス線の濃アルカリを濃縮せしむる等の方法が試みられてゐる。變つた行き方として矢張りカゼインを濃縮せしめた人織を得て捲縮性と同時に纖維表面に凹凸を生ぜしめてゐる。かくて羊毛様の捲縮性並にスケールは一時的には賦與し得るも之を永續的のものとする事即ち洗濯、アイロン等の操作によつても安全なものとする事は出来てゐない。

原因は大豆カゼイン人織の強度の不足せりと、耐水性に乏しき點に存在する。市販の該纖維を以つてして乾燥時一デニール當り一〇瓦以上を出て、併し伸度一〇%を越さぬ細さである。併しこれと適宜に掛ける方法と、大豆カゼインを大なる變性なしに抽出分離する良法が發明された曉に於ては、一五瓦一、〇瓦、二ニールの纖維が得られぬと誰が斷言し得るか。現在當研究室に於ては落花生カゼインより優秀なる人造纖維を紡出する事に成功し、其強度も従來のものに遜色を認めないものとなつてゐる。而も之れに耐水加工を施せばカゼイン人織の最大缺點は苦もなく除去し得らるゝが故に、大豆カゼイン人織の生さるべき道は多分に残されてゐると考へざるを得ない。

最近超短波の研究の應用として、纖維素質人織又は蛋白質人織に超短波を作用せしめて以てミセル排列をして定位をとりしむると同時に纖維に捲縮性を賦與する試みがある。現在引張紡績法のみによる物質的方法に更にかゝる物質作用の應用により化學纖維の完成に拍車をかけつつあるは吾人絹絲化學者の以つて他山の石とすべきである。

以上は東京生活を中心として述べたが、このことは東京に限り展開されてゐる。地方もこの際自肅、いやしくも健康上ためにならぬと思はれる事柄は、この際断絶除去すべきである。(十月六日、福井にて)

生活一新の秋

確水 茂

砂糖節約は體位の向上
最近、砂糖の配給が一層統制されて來て、從來のやうに砂糖をふんだんに消費することが出来なくなつて、一部では恐慌を感じてゐるものがある様だ。然し私は、この砂糖の配給の少くなつて來たことは國民體位向上の立場から非常によいことだと思ふ。もつと早く砂糖の統制が行はれ節約がなされてゐたら、國民の體位を今日のやうな不良に陥らしめずして済んだのではないかと考へ思ふ。

味の素 撲滅
聞くところによれば「味の素」といふものが品切れで、東京ではいま手に這入らないといふ。だから「味の素」黨には大恐慌らしい。僕は「味の素」黨にはいやなことは致し方がない。「味の素」がどれだけの營養價値を持つてゐるか知らぬが、「味の素」がなければ生きてゐられぬといふやうな人もある。さういふ非常時を期して「味の素」黨を撲滅して了らねばならぬ。

都市の子供の體位低下
つい近頃、東京市の校長さん達と會合する機会を得た。その際、これら小學校の校長さん方が言はれたところによると、東京の小學校の生徒は非常に體が弱いといふことである。暑中休暇が終つて登校し初めた頃、訓辭のため校庭へ五分間立たせておけばもう病人續出だと語られてゐた。これは誠に困ることだといふ。だがその通りであらう。都會生活は愈々不健康だ。あらゆる條件が體を悪くするやうに許り出来上つてゐる。

食料品の着色を排撃せよ
私は、東京で生活する様になつていつも思ふことだが、東京の食料には着色が多くて大嫌ひだ。澤庵にしても梅干にしても、しよがしがしてゐる。あれを見る度に厭な氣持がしてゐる。しかもあの着色料は無害なものも少く、多くは有害だと聞かされてゐる。あのドクドクした着色料の附着してゐるのを見るに食する氣にならぬ。餘りドクドクしい場合は、食べたものでも食べる氣にならずに抛つて了ふことさへある。

食料品の着色を排撃せよ
私は、東京で生活する様になつていつも思ふことだが、東京の食料には着色が多くて大嫌ひだ。澤庵にしても梅干にしても、しよがしがしてゐる。あれを見る度に厭な氣持がしてゐる。しかもあの着色料は無害なものも少く、多くは有害だと聞かされてゐる。あのドクドクした着色料の附着してゐるのを見るに食する氣にならぬ。餘りドクドクしい場合は、食べたものでも食べる氣にならずに抛つて了ふことさへある。

食料品の着色を排撃せよ
私は、東京で生活する様になつていつも思ふことだが、東京の食料には着色が多くて大嫌ひだ。澤庵にしても梅干にしても、しよがしがしてゐる。あれを見る度に厭な氣持がしてゐる。しかもあの着色料は無害なものも少く、多くは有害だと聞かされてゐる。あのドクドクした着色料の附着してゐるのを見るに食する氣にならぬ。餘りドクドクしい場合は、食べたものでも食べる氣にならずに抛つて了ふことさへある。

バスを制限を提唱する
以上は東京生活を中心として述べたが、このことは東京に限り展開されてゐる。地方もこの際自肅、いやしくも健康上ためにならぬと思はれる事柄は、この際断絶除去すべきである。(十月六日、福井にて)

帯に就ての一觀察

杜宇生

壇輪等に於て想像される古代の服装に用ひられた帯から現在使用される帯に至る間には帯自体若しくは使用形式に幾多變遷を重ねたであらう事は想像に難くないが、其一面系統的に所謂衣服に就いて考へるならば、神代に用ひられた服装の間には各々異つた二つの形式のものとも考へられ、此處に服装史を述べんとする者でもないが、若し其假説が許されるならば、古代に用ひられた帯と、現在用ひられる所謂和服に附屬する帯とは全然發達過程に於て異なつたものであらう。と

まれ、帯が世界服裝上に共通的な Band から離れて〇として諸外國に通用する吾が國特有な婦人の裝飾用としての帯に就いて記して見ようと思ふ。

帯の名稱に就ては、他の織物と同様巾の上から廣巾、九寸八寸七寸等がある。廣巾は尺八寸あつて丸帯として巾九寸に仕立てられる。九寸八寸は片側帯又は晝夜帯と稱せられ、六寸七寸は單帯として夏帯に多く使用される。

長さの點から云ふならば、普通帯は一丈一尺を普通としてゐるが、名古屋帯は之の割増即ち一丈二三尺あり、之の名古屋帯生地は普通帯の長さに依り區別されてゐる。

組織の上から分類するならば、縞子、縞珍、博多、小倉等がある。

裝飾用としては、丸帯、片側帯が多く使用されてゐるが、單帯乃至は伊達巻等になつては、日本的なる雰囲気の中にあつて論ぜらるべきものが多くて織物としての工藝的見解は左控へべきであらう。

帯の高價なものとして縞錦が挙げられる。この縞錦は組織の點から申すならば平織の簡單なものであるが、手工に依りて色筆を自在に用ひて模様を下繪のまゝ

に織物面に表はすもので、織る部分の緯を引上げて杼口を作り其部分のみを下繪に従つて緯絲を挿入し、爪で緯絲を置き寄せて織り、三四本毎に筋立て押し組織を完全にされる。然し筋立ての代りに箆を使用する場合もあるが、兎に角手工的に時間をかけて織物として許される工場的な手法を用ひられる點は他の織物と異なる處であらう。

縞錦は其主産地を京都邊としてゐるが吾が國個有なものではなく、コブラン織として知られてゐるが、主に袋物として使用され、現在では其他に帶類、ネクタイ或は卓子掛、花瓶敷等の裝飾用として尙ばれてゐる。

帯に限らず此種工藝的な織物の仕上げに就ては、一技術も藝術的企劃の下になされるものであらう。私が縞の製造に従事してゐる一織物工場を度々訪ねて斯業に從事しつゝ尙も藝術的雰囲気を感じる處を羨しく思つたのであるが、此處には畫家が絶へず出入して下繪を提示して一婦人が一製織にあたつてゐるが、下繪に對する製織上の見解も美的理解の上に立たねばならぬ事を痛感した次第である。

餘談にわたつたが帯の評價を技術的に見るならば、其使用原料及び技術的意匠であらう。

或る特殊なものを除く他、縞紋或は染色により又は刺繍等に依り模様を表はされるが、刺繍は織物の見地より見れば別な部屬に屬するものと考へられるが、帯の大体は之等に依り生成される意匠の評價に在る。染色に依りて模様を作る場合は、其形は自在、色の配合も比較的自由に使用し得られるが、模様から来る平面的な平凡さは帯の組織如何にもよるが免れがたい。一般に縞紋によるものが高價である事は勿論である。

縞紋は一般に帯全体を通じて配置されるが、近年帯の手先即ち帯の二端の中央部の裏にかくれる部分と帯のヘラと稱する部分で帯を裝ふつた折、表に出て太鼓から太鼓に歸る部分と太鼓及太鼓の下に垂れるタレと稱する部分の合計の長さ即ち八尺位の間に其重點が置かれ、其部分のみに絞を織出してあるものがあり、前者と之と區別して前者を通し絞の帯とも云はれてゐる。

加間敷から云へば、少なるものが一般に高く評價されてゐる。廣くて九寸の帯にある意匠を表現せんとするならば技術的に見てもある程度の加間の大なる事を必要とするであらう。

意匠の複雑なるものには杼數の大なる事も要求される。此處に云ふ杼數とは各種色緯絲に依り表はされた紋様の帯の縦の方向の長さの合計と、帯の長さとの比である。五挺の帯とは各種の色の緯の丈の合計が帯の長さの五倍に相當するものと謂である。以上は大体技術的に評價される點であるが、高級になるに隨ひ技術的計算を超越した意匠の代價は到底之等技術的見解に立ちては計りがたい。ネクタイに例をとるならば、縞錦に金銀絲にて模様を出しても其價格の見積は容易であるが、實際の販賣價格乃至は需要價格に至りては吾々の想像出來ないものがある。

同様に限らず、其他の工藝品乃至は趣味品に至りては其複雑性を増すに隨ひ美的評價乃至は需要價格は技術的根據を薄弱にせしめてゐる。かくの如く美に對する物的見解の無意識乃至は服を感じた時、此處にはじめて技術の極地を見出すのである。

帯のみが工藝的にすぐれた織物と云ふ意味でなしに、傳統的な日本的なるものをもつと雰囲気背景として、帯を引き出して見て、絲に紡ぎ、絲を織り、はじめて総合的な科學の而非技術的な意匠の世界が、吾々の眼前に展開された時、うろほひある技術の世界を見出すのはあながち筆者許りではないだらう。

前農林省 蠶業課長 **明石 弘著** ◆最新刊◆

近世蠶絲業發達史

我が國の蠶絲業は明治中葉以後文字通り飛躍的發展を遂げ、東西の斯界に君臨し、世界の市場に覇を唱ふるに至つた。然し其の間幾多の波瀾が繰返され研鑽の苦辛が積まれて來た。茲を以て、我が蠶絲業を正しく認識し、堅實なる運営を企劃し、或は將來の發展を圖らんとするものは、須らく先づ其の推移の跡を究むべきで、當に本書は之が無二の典據である。

即ち本書は其全生涯を本邦蠶絲界に委ね、具に其の歴史を體験して、あらゆる事象に通曉せられる前農林省蠶業課長明石弘氏が、斯界の爲に寄せられた貴き體験の記録で、明治中葉以後、近時に於ける蠶絲業の浮沈、關係者の描きざる努力、學者の研究、局の施設、輿論の動向、等々、蠶絲業發達の道程と之に關する政策を最も如實に描き出された空前の快書である。

〔内容目次〕 蠶絲業の躍進、分布、生絲増産の目標、養蠶經營規模の擴大、養蠶法の進歩、條桑の普及、箱飼其他特殊飼育法、養蠶と労働問題、養蠶工業化の計畫、夏秋蠶飼育の興隆、種桑共同飼育所の設置、桑園の改良と改良の急務、桑園の實態調査、農業センサスと桑園反別、桑品種の改良、桑苗の供給と摘葉の禁止、専用桑園の設置、桑樹凍害の豫防、桑蠶の害蟲の驅除、降灰による蠶兒の被害、蠶兒の飼育、桑樹萎縮病の蔓延、桑蠶の賣買と其利弊、桑以外の蠶兒の飼料、蠶兒上法法の改良、天柞蠶の飼育と柞蠶絲の輸入、製絲業の工場組織、進出、製絲業と労働問題、繭質統一の興隆、職工の素質、養蠶分業法線の普及、製絲業と労働問題、繭質統一の興隆、原蠶製造所の設置、府縣原蠶種統一事業の進展、蠶品種改良の勃興、蠶種輸入の旺盛、一大交雜種の普及、黃繭絲問題、蠶種專賣論の提唱、外一二二章

菊判洋裝函入 紙數 六三八頁 定價 五円五十錢 送料 三十三錢

三谷 徹著	新製 學上卷	菊判洋	六八〇	五、三〇
三谷 徹著	新製 學中卷	菊判洋	五六〇	六、五〇
三谷 徹著	新製 學下卷	菊判洋	一〇〇〇	三、四〇
萩原 清治著	繭 學論	菊判洋	一〇〇〇	三、〇〇
中川 房吉著	訂製 繭能率論	菊判洋	五六〇	四、〇〇
中川 房吉著	絲格向上製絲法	洋布判	三九〇	三、〇〇
中川 房吉著	養繭學原論	菊判洋	二一〇	二、二〇
田村熊次郎著	製絲學新論	菊判洋	三四〇	四、五〇
鈴木 三郎著	乾繭學論	菊判洋	三四〇	三、三〇
味澤 泰造著	現業手帳	洋四六三圖	一八三	一、〇〇
小山 清著	製絲現業便覽	洋袖珍裝判	一八〇	九、〇〇
小山 清著	製絲原料便覽	洋袖珍裝判	二〇〇	二、〇〇

東京市神田區錦町一
振替東京一三一九〇
明文堂
進目圖書

母校ニユース

軍人援護に關する勸語捧讀式 十月三日より軍人援護強要週間に入るに當り其日母校でも午前八時より講堂に於て軍人援護に關する勸語捧讀式が舉行された。

談話會例會 十月六日及二十六日午後四時より例の如く千曲會館に於て談話會例會が開かれた。演題、及講師は次の通り。

片岡維雄氏退職 諏訪蠶絲卒業後、小諸純水館、上田市役所稅務課勤務後、昭和十年四月母校副手を命ぜられ製絲科管理室に在つて學生の製絲實習指導事務々林教授の手傳をしていた片岡維雄氏は十月六日付を以て退職せられ滿洲國東安省公署附植産科に勤務される事となり十月十日出發された。益々御發展を祈る次第である。

生徒主事宅に電話 今回生徒主事用電話が行元生徒主事宅に架設され先頃より開通した。上田局五九一番である。

動物學會に山口助教授出席 十月十一日上野科學博物館に於て第三回日本昆蟲學會及十二、三の兩日東京第五回大學及醫學部に於て日本動物學會第十五回大會開催せられ母校からは山口助教授が出席された。前者は講演者數二十名(講演時間十五分)、後者は九十五名(一人十分)の多數に上る盛會であつた。

第廿四回陸上大會運動會 恒例の陸上大會運動會は運動日和に相應し十月十五日舉行された。午前八時全員校庭に整列、宮城進拜、次いで校長の訓示あり終りて三科の選手應援團は國歌も高らかに順を追ふて入場し、夫々團長拍手の紹介、選手の宣誓を行ひ九時競技は開始された。

科食堂は醬油、汁粉、團子、菓子、果物製絲科賣店は眞綿、石綿、紡績科賣店ではタオル、靴下、富士絹、縫紉機等であつたが午前十時頃迄には食堂を除いて他の賣店は全部賣り切れとなつて終つた。事變下の運動會の事とて街頭宣傳も余興もない運動會であつたが好天氣に恵まれ、上田名物の一つに數へられては専門の運動會を見逃すなと集まる觀衆は極めて多かつた。戦前伯仲を余想されてい

た對科競技は俄然盛衰、紡績の競あとなり結局紡績科が第一位となり午後四時半校長の訓示を以て極めて盛會裡に運動會の幕は閉ぢられた。

Table with 4 columns: 種別 (種別), 選手 (選手), 成績 (成績), 備考 (備考). Lists various sports events and winners.

蠶絲學會に小林講師出席 十月十六日午後七時有樂町蠶絲會館に於て蠶絲學會小集會が開催され母校から小林敏講師が出席講義された。當日の演題及講師は次の如し。

蠶絲學會に二氏出席 十月十七日午後二時より東京市新橋藏前工業會館に舉行された蠶絲工業學會秋季講演會に山田、吉平兩講師が出席講義された。因に當日の演題及講師は左の通り。

滿洲國視察團來校 滿洲國警察官日本視察團黑河省漢河縣警署(官職)呂錫慶氏外十五縣の警務部長廿七名は廿日午前八時上田警務署に於て國有林の經營及管理組長、下野の官有林を視察、別所温泉に一泊、廿一日母校及上田鐘紡を視察東上した。一行は内地に來て人間の多いに吃驚されたとの事だ。

卓球部山梨高工に遠征 卓球部では十月二十二日收野(三)、竹下(三)、池田(三)、佐藤(三)、宮田(三)の五選手を以て山梨高工に遠征、定期戦を行つた。母校の選手は相當な腕利きと思はれたが結局五對二で負となつた。

三年 行程八、三〇〇米の行軍 後上田飛行場に於て部隊教練(戰闘)、密集教練の目的を以つての試問。

岩佐實業事務局局長來校 縣下の實業學校視察の爲入信中の文部省實業事務局局長岩佐松五郎氏は長野市から廿五日午前八時四十分上田市上田市商工會議所の笠原會頭、井上議員、岡田理事三氏と共に母校に視察に來られ、校長の案内で教育内務、設備を見聞され午後四時二十六分上田發松本に向つた。

湯原助教授母堂逝去 久しく肉腫にて病床にあつた湯原助教授母堂(七十才)には藥石効無く十月廿六日午後五時逝去された。海に御愁傷の事である。

防空訓練實施 本年度第三次東部防空訓練は十月廿四日午前九時より三十日午後九時迄行はれた。今訓練の目的は陸海軍の行ふ防空訓練に則し國民防空能力の向上すると共に防空組織及設備資料の強化促進を圖るにあり、訓練事項として(一)精神訓練、(二)實戰的訓練の實施、(三)長期に亘る燈火管制の實施の徹底を期するに在り。母校では一特設防護團として廿三日午後全員集合して校長先生より本訓練の目的その他種々注意あり二十四日より警報、燈火管制班、防火班等晝夜を分たす各々分擔職務を果し、數度の爆彈投下の際には即時授業を中止防火に消毒に本訓練目的達成の爲全員協力實施した。

勸語捧讀式 十月三十日午前八時より講堂に於て教育勸語並に教職員下賜勸語の捧讀式が舉行され、式後引續き勸勞報國隊員賞狀授與があつた。

柔道部相澤四段明治神宮國民體育大會に出場 柔道部主將四段相澤清正君(紡績)は明治神宮國民體育大會柔道部大學高等專門學校個人試合に出場、十月三十一日午後二時より小石川講道館にて立教大學藤科菊地三段と對戦、柔道部のホープとして同君に期待する處多かつたが、練習不足の爲惜敗した。尙田中英一君(蠶)が補缺として出場した。

弓道部新人明治神宮國民體育大會に出場 定期戦を終了した弓道部の新人、武井、上島、佐藤(補缺)(以上紡績)、森山(紡績)、橋詰(紡績)君等は十一月一日の明治神宮國民體育大會弓道試合に出場、全國より集まる大學高等專門學校八十二校に伍し、大いに華々しい活躍振りを示した。即ち第一次戦八十二校中十二校選抜に於て十六射十一中以上にて已に九校は決定し、残り三校は十中の本校、早大、慶大等十校より競射決定されることとなり結局四射二中で優勝候補早大を一中勝ち抜くも惜しくも失格捲土重來を期した。

湯原氏神宮大會庭球試合に出場 母校に於ける庭球の第一人者である湯原助教授は市内の伊藤祐一氏と組んで明治神宮國民體育大會庭球男子一般府縣對抗試合に長野縣代表三組の一組として出場一回戦は不戦勝、二回戦は十一月二日比谷コートにて愛媛縣代表の上平松澤組と相打ち、相當な打合をしたが結局四對一で負となつた。

野外演習 本年度の野外教練は例年より稍遅れ、十一月一、二、三、四日の四

日間に亙り、長野―須坂―湯場(山田温泉)―小池峠―安代―箱山峠―中野―豊野のコースを以つて實施された。参加人員は學生二六〇名、職員は指揮官高木大佐、小山少尉の外校長先生、學生課行元、志賀、宮原、養蠶科山口、製絲科山田、紡織科小林(博)、會計清水の諸先生であつた。出發前及豊野驛にて僅かの降雨ありたるも演習間通じて秋晴れの好天候に恵まれ恙無く所期の目的を達する事が出来た。演習實施の概要は

蠶絲學雜誌第十一卷第四號紹介

先般發行となり讀者諸兄の御手許に配本となりました蠶絲學雜誌第十一卷第四號を御紹介致し未だ讀者でない方に御推め致します。蠶絲學雜誌編輯係

報文

第十一卷 第四號 目次

- 1、桑樹のザイラス病に關する研究(其の二) 遠藤保太郎
 - 2、桑條の利用に關する研究(第2報) 伐採枝條の利用に依る人工發芽桑葉の飼料的價值に就て 齋藤恒菊
 - 3、貸借對照表より見たる製絲資本の構成(1) 小泉次雄
- 調査
蠶卵の冷蔵鹽酸解法に就て(第一報) 適當なる低温接觸時期、接觸低温及鹽酸の刺戟度 室賀兵左衛門

御會食に 御宴會に

レストラン 香青軒

明かな洋室 落付いた
和室 (數室)
上田市袋町 電話13番

御來田のお土産は……

みずい餅 上ノフルーツ
杏仁水飴 栗羊羹
信濃そば 黒羊羹
米煎餅 クルミ羊羹
果物類 罐詰

上田市松尾町
上飯島商店
電話長二六〇(販賣部)三五四

千曲會指定旅館 別所温泉館

柏屋別荘
電話 一一三番

花屋ホテル
電話 三一三番

茶代廢止
御宿料二圓

上田名物

- くるみまんぢう
 - くるみ最中
 - くるみ羊羹
- 御みやげに！御贈答品に！
上田市松尾町

鹽川總本家
電話二十九番

轉任御挨拶
謹啓
時下秋涼之候益々御清秘之
段奉慶賀候、陳者私儀茲縣
試験場在職中は公私儀並に
情を賜ふし感銘に於ては今
も長野縣養蠶試験場上田支
務を命ぜられ候に就ては今
層の御指導に賜り候に御
挨拶申述度如斯御座候、
昭和十四年十月
長野縣養蠶試験場上田支場
井澤喜三

退職御挨拶
謹啓
時局愈々多岐の折柄皆々
陳者私儀は上田蠶絲専門
在職中は公私儀並に至りに
安省和氣に於ては、今回、
事との相成候に就ては、今
先は御成候に就ては、今
昭和十四年十月十日
片岡綾雄

信濃路の旅に！
善光寺詣りに！
母校訪問の折に！
清流千曲川畔
戸倉温泉
千曲會指定旅館
笹屋ホテル
電話 戸倉 特長三番・一〇番
三三番・別館
三四番・別館
上田 一四番・別館
東京出張所 下谷(83)六六四五番

御入信の節は
何卒御光來を！
上山田温泉
千曲會指定旅館
清風園
電話 上山田代表 五六番
電話 戸倉 三一三番
別館電話 上山田 一四番

御靜養には
感じの好い別荘を

本會記事

本會日誌

十月三日 松浦卓三氏外六名へ慰問品發送す
十月五日 三好圭一氏外十名慰問文及寫眞發送す
十月七日 各支會長宛代議員會提出問題照會す
十月十七日 北陸千曲會開催せらるる浦生理事長出席す
十一月三日 戸倉温泉旅館に於て北信千曲會開催せらるる理事長以下役員出席す
十一月四日 上越湯澤温泉に於て越後、群馬兩千曲會總會開催せらるる倉澤理事出席す

支會役員交迭

十月二十九日天龍峡畔龍峽亭に於て龍川千曲會總會開催、副支會長を左の通り改選せり。
新任 酒井五十三 森本爲之助
退任 東海千曲會に於ては今回役員改選の結果左の通り決定せり。
新任 支會長 松野 正一
退任 支會長 野澤 泰治
新任 副支會長 芝野 康雄
退任 副支會長 吉野 健吉
新任 幹事 寺本 武吉
退任 幹事 橋本 武光
事務所 愛知縣小牧町大字新小牧 橋本武光氏方

縣會議員間宮成吉氏より

肅啓 陳者今度縣會議員選舉に當り格別なる御聲援を賜はりに御蔭當選の榮を得候段不尙感激に堪へざる處に有之厚く御禮申上候、此上は御高志に報す可く懸命の努力可致候條何卒倍舊の御厚情を賜り

第十三回代議員會開催通知

来る十一月二十三日午前九時より母校に於て第十三回代議員會を開催致します。支會長各位には管内代議員に御出席下さる様御配慮願申上げます。而て御參會下さる各位の御氏名前以て本會迄御通知下さい。
昭和十四年十一月

千曲會

度奉願候、先は不取敢以略書御禮迄如斯御座候 敬具
昭和十四年九月二十九日
岐阜縣加茂郡田原村 間宮成吉

向上資金寄附

左記の通り本會向上資金として寄附せらるる洵に感謝に堪へず御厚志に對し本紙上を以て厚く御禮申上ぐる次第なり。

金拾圓也 石原 石司氏
金四圓五拾錢 平澤和 司氏
以上北陸千曲會會長長坂角田 收氏
金八圓也 後藤 宰一氏
金參圓也 角田 收氏

針塚長太郎先生謝恩 第五回
記念資金申込報告 日現在

針塚長太郎先生謝恩 第六回
記念資金受領報告 日現在

金貳拾四圓也 中澤 忠
金貳拾圓也 丸山俊一郎
金參圓也 内田訓之亮(追加分)

訂正 十月號發表の累計金壹萬〇參百參拾圓也
拾圓也金壹萬〇參百參拾參圓也とす
内田先生記念品贈呈 (第五回)

川部村 千尋
阿部 次男
山田 信男
中田 信男
長澤 四郎
宮田 正浩
濱田 正浩

金壹圓五拾錢 富岡 茂秀郎
金壹圓也 成尾 喜八郎

右合計金貳拾七圓也
訂正 十月號發表の累計金壹萬參拾貳圓也
金壹百七拾貳圓也に訂正す

會費領收

昭和十四年度會費金四圓也
訂正 十月號發表の累計金壹萬參拾貳圓也

仙臺 仙臺 仙臺
治田 治田 治田
宮田 宮田 宮田
武田 武田 武田
關本 關本 關本
宮野 宮野 宮野
向坂 向坂 向坂
中野 中野 中野
岡田 岡田 岡田
尾崎 尾崎 尾崎
河野 河野 河野
三野 三野 三野
古川 古川 古川
赤松 赤松 赤松
山崎 山崎 山崎
高橋 高橋 高橋
馬場 馬場 馬場

會員名簿編輯中に付御願

吾が千曲會會員名簿は例年十一月發行出來たのでありますが、本年は種々の事情にて遅れ來月になりまして故御了承願ひます。就ては勤務先或は住所を變更された方並に應召或は召集解除になられた方にて未だ當係の方に御届けにならない方は大至急御届願ひます。尚一般に住所不届の方が多いためです。便多き故是非共お知らせ願ひます。

會員名簿編輯係

公立中學校教諭ニ任ス、高等官七等特選
第二東京市立中學校教諭ニ補ス(十月十七日)

母校之部

副手 片岡 綾 雄
副手 岡 亨四郎
副手 阿 亨四郎
學生課勤務ヲ免シ養蠶科勤務ヲ命ス
養蠶科勤務ヲ免シ庶務課勤務ヲ命ス

卒業生之部

公立實業學校教諭 田口當五郎
公立實業學校教諭 岩切 作次
公立實業學校教諭 新庄哲二郎
公立實業學校教諭 黒岩 覺

叙任辭令

入會金五圓也
千曲會准會員會費昭和十三年度納入者
叙任 伊藤 一義(銀三)
叙任 伊藤 一義(銀三)

職員の部

第二東京市立中學校教諭
陸軍歩兵中尉 小澤 丘

高等官四等特選

地方農林技術師 山本岩三郎
森本爲之助
地方農林技術師 奥村 好一
三好 彌市

高等官五等特選

地方農林技術師 小澤 光雄
中津信一都
公立實業學校教諭 五島眞喜太
公立實業學校教諭 山本辰五郎
公立實業學校教諭 佐谷月健次郎
公立實業學校校長 佐谷月健次郎

支會通信

井上校長先生を大田に迎ふ

朝鮮蠶絲業界に於ける最大年中行事の一つたる蠶業講習會が江原道で開催されるに際し母校上田より井上校長先生が御來鮮下さることが發表されるや在鮮千曲會員の喜び方は一通でない。而し講習會に出席出来ない吾々何うして御目にかゝるか問題であつた。折しも朝鮮千曲會より「井上校長六日大田着」の豫定」の電報を受けた忠南、全北兩道在住同窓生一同は喜び勇んで大田驛に先生をお迎へすることが出来たのである。

十月六日午後六時三十分國際列車が驛ホームに着き「コ」しながら下車を待つ先生の姿をデツキに見付けた瞬間何とも云へぬ涙がこみ上げて来るのを何うすることも出来なかつた。卒業以來十数年振に見る先生のあの目、あの口、そしてあの特徴ある微笑だ。恐らく之は一人筆者のみの感激ではなかつたらう。

長途の旅塵を温泉に洗つて頂かうと朝鮮には珍らしい市外の温泉旅館に前日より交渉したあつたが不幸にして既に○中將よりの先約があり上等の部屋がない、中將よりも偉い人が内地から来たのだから是非一番の部屋を開けて呉れと嚴談に及んだのだが時節柄○の○で申譯無いが二番の室で辛包して貰ひ度いとの話に止むを得ず温泉を断念して街宿に御泊願つたことは返すも相済みぬことであつた。

お疲の處泊に恐縮ではあつたが折角の機會故斯業關係者二十名ばかりで先生の御高説を拜聴致し度くさやかな歓迎の宴を催したる處先生には心良く御出席下さつて種々嶄新なる御話をされ又朝鮮の珍しい事情を御尋ねになつたりして列席者に非常に好感を與へられたことは先生の御人格の現れであつて吾々敬へずしては實に嬉しく思ひました。殊に相當長時間に亘り遂に足を崩されず端然として御座りになつて居たことは一同敬服致した次第である。

翌七日は早朝より郡は大田工場、全蠶事務所を視察され、道廳に知事、内務部長、産業部長を訪問挨拶され、更に蠶業取締所では種蠶繭加工、桑皮紙加工眞細加工其他蠶麻蠶等に付き本道研究中のもの二三を御目にかけました。處先生は殊に興味がけに色々御話なされた。

知事との御話に花が咲かれたことと大變手間どり遂に豫定の列車に乗れず午後一時發北京行のぞみで京城に向はれました。列車は文字通りの壽し詰、全く立錫の餘地もない状態に於て約一時間デツキに立ん棒されたことは迄に御氣の毒でした。矢島氏は京城迄、關、宮本兩氏は鳥致院迄送迎し其他の同窓生は大田驛でお別れ致した次第である。

年賀挨拶募集

例に依り本紙明年一月號に登載する年賀挨拶を募集致します。元費節約券々本紙援助の意で何卒多数御申込あらんことを切望致します。殊に本年の如き非常時局に際しては年賀状に替ゆるに本紙上挨拶を以てするは最も意義ある方法と思ひます。少くとも會員間ではさうしたいものです。

一、締切期日 十二月十五日迄
一月號は特に元旦に配達される様にす為め締切期日を右の如く早め
ます。年賀挨拶以外の記事も同日迄に送附して下さい。

一、料 金 一人 金五十銭
特に指定なきときは勤務先姓名を載せ、記載事項に註文ある向は原稿を送附して下さい。字數が餘り多しと割増金を御願ひするかも知れませんが、御申込と同時に料金を振替口座東京四三三四一四番へ年賀挨拶の旨御明記の上御送付下さい。

昭和十四年十一月 千曲時報編輯係

細道便り

岩手支會會費の辭
最近我岩手には相當千曲會員が増加して在籍者なんて言ふと少々おかしなかも知れないが、縣内に在籍者が十六名居るのである。唯其の内應召者が三名あるので

實際は十六名マイナス三名と言ふ事になつてゐる譯である。
こう澤山に居ても御互仕事に追はれたら、それに假へそんな機會に恵まれても廣義千万里と言ふダマツロイ縣にバラ／＼散在してゐるので、一昨年だつたか一寸一部の者が集つた事がある丈であつたのでいつか一度是非集つて見たいな考へつゞけてゐたのが遂その機會に恵まれず今日に至つたのであつた。處が丁度過る八月中頃浦生先生から井上校長先生が末頃に盛岡へ行かれるやうになるだらうと鶴田課長宛の來信に接し、この機會を逃せず全員集り度いと言ふ譯で、ヨリ／＼準備してゐたものである。處が色々都合で當日漸く御來盛の日時が判つた様な次第で遺憾乍ら遂に全員集合は出来なかつたがそれでも寄書に見られる通り

近藤義信氏歓迎會
南支、北支と二年三ヶ月の永い間戦線に於て輝かしい武功を立てられ去る○日日出度凱旋除隊となられました。會員近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

山内一等兵隊

山内一等兵隊 氏は養蠶科二年在學中應召、當時高松少尉殿の中隊に入隊中であつたが多分第一線に出られたことと思ふ、ペンを取つて筆を取つた皇國日本の男兒だ、何うか武運に恵まれ充分御奉公出来ませう御祈ります。

宮本豊彦氏 養蠶科十五回卒、忠南原蠶種製造所勤務、體も小さいが氣も小さい時々問題を起しては先輩の世話になつて居る。(宮本豊彦記)

青木茂美
松野輝夫
近藤義信

近藤義信氏歓迎會

近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

歡迎

歡迎
近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

歡迎
近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

歡迎
近藤義信君の歓迎會をさゝやかに去る十一日夕當市敷島食堂に於て相催しました。氏の戦場に於ける色々な苦心談又「モア」たつぷりの話もあつて一夕極めて愉快に過ぎました。氏は實に張切つて元氣です。之は其時寄書したものです。

計報

弔慰金募集

故宮坂 正彦氏(蠶二) 故副田 好美氏(絲廿一) 故平山 俊夫氏(絲十九) 以上三氏に對し弔慰金を募集致しま...

故平山俊夫氏遺族よりの禮狀

謹啓亡長男俊夫儀送葬に際しては御多用中にも不拘御弔電を添へし且又御鄭重なる御芳志を賜り御懇情洵に難有奉深謝候...

弔慰金報告

- 故大名 昇氏弔慰金 原田 兵衛 高田 茂重郎 松野 正一 岩本 市郎 清宮 忠保 花岡 文作 中澤 善吾 鶴岡 定平 高橋 登一 朝倉 昇 矢澤 茂 飯島 正胤 遠藤 文登 飯田 正胤 小林 福雄 飯田 正胤 右合計金五拾六圓也...

故副田好美氏弔慰金 萩原 清治 町田 博 大井 正夫 窪田 潤 故深美政人氏弔慰金 黒田誠一郎 金貳圓也 多川 澄平 右合計金參圓也...

故副田好美君弔慰金(同級生北澤市原坂) 太田 三郎 大岩 巖 横澤 平 征矢 克彦 一之瀬 彰 松野 輝彦 三宅 隆 市原 文雄 池田 爲雄 白井 四郎 高橋 常雄 田ノ岡 實 北澤 常雄 小井土 英二 金丸 長功 瀧澤 正平 西山 剛徳 夫 森 剛徳 夫 右合計金五拾圓也

同期生の死に遇ひて 千 枚 生 養蠶科第二回といへば大正四年の卒業だから今年で丁度二十五年になる。同期生三十六名、不死身を誤つた同クラスも昭和十年に原が抜け、先頃また宮坂が死んだ。人生僅五十年、七十は古來稀だといふ、その定命五十前後に達した年輩のことであるから、之からは段々齒の抜けるやうに缺けてゆくことであらう。老境に入つてから同年輩の者に死なれることは、殊更に哀愁の感が深いときいて居たが、今度宮坂の訃に接して、成る程と感じた。これから後は一層然うなるであらう。

昭和九年十月の本誌に、千枚漫語として、『卒業後二十年も経つと云ふのに一人の死亡者も出さない蠶二生は確に不思議の存在ではないか。然し之から先はさうも行かないから、兎も角一同揃つて居る間に是非寫眞アルバムを作つて置きたい』との結果昭和十二年五月に至つてアルバムが完成した。宮坂はそのアルバム中、故人としてトップを切つた譯である。

今アルバムを開いて、宮坂一家の寫眞に見入る。中央藤椅子に腰掛けた主人公の傍、蕭洒な夏服姿で紳士ツラをして居るが、見て居る内にだん／＼學生時代の

彼氏が浮んで来るからなつかしい。奥さんに子供五人、内男兒二人女兒二人、一人は赤ん坊で性別が判然しない。感想文の欄には次のやうに誌してある。 再三御催儀を受けました感想文は、逆も拙文で御目にかけられませんが故郷に御申付ありまして御送りに申上げることが出来ません故、私の分は又キにして置いて下さい。(十二年の年賀状に添書)

養蠶科第二期學生のクラス會をモラス會と言つた、蓋し襟章の桑の葉に因んだ名稱である。そのモラス會有志が卒業記念として千枚生編む所の「フリースビー」なる小冊子を級友に頒つた。之は同期生の人物目録であるが、戸籍調べとニッポンの由來を主とした罪のないもので表紙裏に『此書を讀んで笑ふ者は君子也千枚の言をきいて怒る者は小人也』と書いてある。そこで此際宮坂の頁を繰つてみる。「焦點君」としてあるのが彼氏のことだ。

原文の順序を變へて、アチコチ抄録してみると、 君は九度の眼鏡を用ひる位極度の近眼で、物を見るのに首を振つて焦點をあはせる。だから焦點の渾名があるのだ。英語で呼んでフォーカスとも言はれて居る。蓋しモザイク・セオリーは復眼でない君の眼にもあてはまるらしい。諏訪中學を中退して千葉縣松戸市中(千葉高等園藝の前身)を卒業したが中退の理由に就ては堅く秘して語らない所が奥い。

初め高師を志望したと云ふだけであつてどことなく教員じみた所がある。性質はきはめて溫和、運動は少し柔道をやり、酒はあまりいけぬが煙草は大好き、長髪管でバクリ／＼喫ふ圖は誠にキザである。

以上では彼氏のプロフィールとして物足りなないが、校門を出てから二十餘年一度も會ふの機会がなかつたけれど、香桑園子が誌す所の追憶を讀むと卒業後の彼氏はやはり學生時代の彼氏であつたらしい。

宮坂の行年四十九。七難苦厄の厄年である。始終苦、死重苦など聯想されて實にイヤな擲を持つ歳だ。處で俺もおき其の歳になるのだ。何れの日か千枚を憶ふの一文が本誌に載ることとなる。その執筆の役を引受けるのは誰だらう。又その時は定めし此の一文も引合に出されることだらう。ナンテ考へることが既に不吉の豫感であるかも知れぬ。「枯枝に鳥のとまりげり秋の暮(芭蕉)時は正に晩秋、千枚に此文あるはお歳のせいであらうけれど、併し又、

いつ迄も生きるツモりで働け。今夜死んでもいい、覺悟して生きよ。 といふ座右銘を披露したい爲でもある。 實に意味深長な名句ではないか。

きふまで他人事とのみ思ひしに 俺が死ぬとは之はたまらぬ (二四・一一・五)

故副田好美中尉御遺族を弔問して 福島 鋼次郎 小山 祖光 過日小生等故副田好美君御遺族を福岡市下長尾町の御生家に弔問申上候處未だ戦死に關する詳細なる報告無之由に御座候へ共其の際御聞き致したる模様御報告申上候。

副田君は昨年〇月應召〇〇隊〇〇に入隊十月未頃出征せられハイラルに待機し居られたる處本年五月頃國境の風雲愈々急を告ぐるに至り國境警備の第一線たるハイラルに向はれ七月中旬頭部に負傷せられたるらしく再び第一線に立たれ隊長として御奮戦中遂に名譽の戦死を遂げられたる由にて誠に哀悼に堪へざる處に御座候。

御兩親の御話に依れば昨春より母校より歸られたる際長男ではあり適當の年頃なられたる事故御兩親より結婚を再三奨められたるも軍籍にある身なれば固く辭し妻帯せられず只管應召の日を待たれたる由にて既に應召前より一死報國を決定し居られ候様拜察致され候、殊に御戦死前日八月十四日附御兩親宛最後の御手紙を拜見致候も『今度こそは一死以て國恩に報ず可き秋なりと覺悟せるに依る最早亡きものと思召されたし』とて自分の戦死後に於ける一家の諸事につき意見を述べられ、相續の事、形見の事、御令弟の教育に關する事、更に自分の葬儀、墓標に關する事に至る迄簡條書に詳細に認められ其の御覺悟の程こそと拜察致され候。

御兩親は『副田家の名譽之に過ぎたるもの無し』と申され居り候も此の最後の手紙を手にせたる時の御胸中は如何ばかりなりしやと御察し申上げ、ぼつ／＼と亡き吾子を語られる御兩親に何と御答へし御慰め申上ぐべき乎小生等は只々言葉もなく頭の下るのみに御座候。 尚御遺族は御兩親を始めとし四人の御令弟にてその中次第は滿洲に御出征中他の方々は九州帝大其他に御勉學中と承り候。 拙筆にて事情盡し難く候も不取敢弔問申上候際の模様御報告申上候(十月二十六日、蒲生理事長宛)

副田中尉殿の戦死を悼む (絲二二卒) 岩 切 生 副田好美氏名譽の戦死の報を見たのは十月一日奉天隊であつた。新聞の報道が間違ないか又同姓同名かとも知れないと思つた、併しノモン云々、酒井部隊副田好美氏とあつたから驚きの外無かつた。 想へば副田さんには上田時代九州人の後輩として二ヶ年蔭に陽に指導鞭撻して居つた。副田さんは先輩と言ふよりは寧ろ自分の兄の如き感じの人だつた。上田時代は當時の學生諸兄の能く知る所であつた。

昭和十二年日支事變勃發以來自分が名譽の應召を受け、千曲時報を見る度あの學友もあの先輩も應召かと次々に目にとまつた。 憶か昭和十三年度夏絲二一副田さん應召の記事を見て、若しかすると先輩の副田さんが滿洲に來ているのではないかと思いつく。滿洲西部國境ハイラルにて酷寒期を紡一五上田正三君と奉公中であつた御國離れて一千里間密先輩と同じく應召の身で顔合せの程嬉しいものは無い。 紡一五上田君事變前現役も自分の隊と同じで事變後僕が應召され又々其上宿舎迄二人一語と特別な縁だど何時も笑つて居た。 昨年千曲會より白倉さんが副田さんが

友の靈に

廣島 征矢 克郎

海拉爾に居られるとの便にて電話したら翌日軍服にて懇々來除され、僕と上田君副田さん三名にて時の趨きも忘れず曲會の語其の他四方山話に花が咲いた。幸ひ宿舎が三軒隣の爲朝夕顔を合せ三人生活力強き國境生活を本年四月迄なした。副田さんは學生時代と比べ一段と人格者で又親みあり部下上官の信認厚く青年將校として異彩を放ち私的の時等部下への思ひやりは自己自身を忘れて居られる風だった。

酒も殆ど飲むと云ふ程でなく愉快になり又朝らかな座談する位一寸飲まれると云ふ程度だった。陣中の餘暇も寫眞を趣味にして其の品行は部下は勿論我々後輩も範として國境警備に任して居た。零下五十余度の演習に九州育ちの我々は凍傷に罹つた時、副田さんは鼻頰、僕は鼻炎耳をやられた時お互早く酷寒に馴れませう等と話し合つた。

あの生活、五ヶ月の生活は何時にも上田時代の東寮の生活其のものだと云つて居られた。戦友の軍歌「一本の煙草も分けて」の文句の如く、慰問袋、手紙、煙草も分ち合ひ毎日を激勵し合つて来た。僕は本年〇月ある任務の爲一時南滿に來り〇〇〇〇〇〇の任にあたる命を受け〇〇〇〇〇〇の夜の別の會を催さうと言ふ事でもチカカの側で陣中の宴を開き一晩楽しく四月とは云へ北滿は零下三十度の夜長く話し再會を約して四月十三日出發した。

計らずもノモンハン事件勃發、副田さん上田君の活躍の便を見る毎に思ひは昨年より零下五六十度で活躍した演習場即ちノモンハンに心走れども命令なれば致し方なく自己の任務に邁進しつゝ近來副田さんより音信不通となつた。

突然副田さん戦死の報に接し情別の情壓へ難く兄弟の如き感じて感慨無量である。併し何時の日かノモンハン戦場の仇は必ず討つべくやるぞと一層元氣づけた。今度の副田さんの英靈に報ゆ可く層層層層一番せざるを得ない。〇〇國境行きを〇日に控へ余暇にて筆の間に間に拙文亂筆悪しからず御赦下されい。

副田君 僕は今、君の爲に、いや僕自身の爲に君への追悼文を書かうとして居る。僕の拙筆の跡型が果して君の生前を正確に描寫するものであるか否かを吟味する餘裕すら無い程に呆然として居る。實際僕はこの一文を成す事によつて、副田、生前の偉業とか或は徳だとか、そんな種類のものを讃えて通り一片の追悼文としようとは思はない。國家の爲に、斯業の爲に副田の死を悼む前に、飽く迄も僕自身の爲に彼の死を悼むのだ。

十月上旬母校町田君からの音信に君の戦死の報を知らせて来た時には、僕は不覺にも愕然とした。涙は出なかつたが心に、畜生ヤツだなと云ふ敵愾心が誰にもなく勃々として僕の全身にみなぎつた。本當だらうか、人間の生命とは斯くは

かなくも頼り無いものであらうか、ほんの一瞬が、唯一個の彈丸に因りて人間の生命に生死の境界線を劃する。信んじられる事だらうか。人間は死んで居るが本當だらうか生きて居るが本當だらうか。生きて居ると云ふ事が、一つの偏見としか考へられないと云ふ思ふのだ。

副田君と云ふ君の姓名の四つの活字の配列が、世の中の總てのものから抹殺し去られるであらう事を想像して、僕は轉た寂漠の情に堪えない。いやそれよりも増して堪えられない事は、君の顔が、聲が、君の持つ温度が實在のものとして永久に僕に呼び掛けては呉れない事だ。君は一体何んの爲に生れて来たんだ。正しく君の短い生涯は、闘ひに終始したと云へる。文字通り戦に生きて闘ひに死んだ。男の名を冠せられて、戰場に於て屍を馬革に包む。男子の本懐であらう。

よくこそ闘つて呉れた。よくこそ死んで呉れた。更に亦人生の目的が、現在あるものその儘の姿で、いやそれ以上に高度化した文化のバトン、をノックアウト。ジュネレションに渡すべき最大のものであるとしたならば、君の死は、ノモンハンの廣漠たる大草原に吸はれた君の血潮の一滴一滴は、次の文化を建設する大きな基礎となるであらう事を信じて僕は自ら慰めやうと思ふ。

君と僕との交友は久しい。上田への入學當時に始まる。學生時代の三ヶ年と、副手時代の二年半、短い人生の總括に於ては相當に長い期間であると言つて良い。副田亡き今日、徒らに在りし日の君の相親を追ひながら昔を懐かしんで見るのである。どうして僕は君とあんなに親しかつたのかと思ふに思ふ位である。一年の時のかと不思議に思ふ位である。一年の時のかと思ふに思ふ位である。一年の時のかと思ふに思ふ位である。

君はスポーツマンであつた。蹴球、柔道、水泳、ランニング、之等は特に優れ何れも選手級の實力を持つて居た。特に君は水泳が好きであつた。助手時代に官舎に居ては、毎晩、養蠶部の風呂に出掛けたものだ。あの小使室の隣りに風呂があるが、夏であつたから必ず二人であれに飛込んで、而る後に風呂をあびて悠々と官舎に引上げて来たものである。今もあの池は満々と水をたたくて居るだらうか。

亦君は温雅しくて學業も良く出来た。恐らく學業をサボつたと云ふ事は一度もなかつたらうと思ふ。散歩に行かうかと行かむと、オ、行つても良いナ。活動に行かうかと誘ふと行かうか。と云つた具合に決して嫌と云はない男だつた。君は消極的で僕は積極的、この言葉は本當は君は沈着で僕は猪突的だと云ふ事を意味するものであるが、こんな様な相反する性質が反つて二人を堅く結んだんじやないかと思つて居る。

こんな事をクドクド云つて見ても仕方がない。月並みの讚美の言葉は反つて副田への非禮だ。君が僕がこんな事を書いたら草場の蔭で君が居るだらう。餘り見えずいた様なオセジは云ふナ。然し僕は本當の事を云つたに過ぎない。今は君の爲に誇張した言語は慎むべきだとさへ思つて居る位だ。

では一言にして云はう。君は非常に良い、あらゆる點で非常に良い男だつた。君に交つた皆んなが、いゝ男だつたと云ふ。君はそ、云ふ點を誰よりも多分に持つて居た男である。最初の印象は悪い男である。君は無口だからである。然し一度交れば亦非常にいゝ男である事を知る事が出来る。副手時代、と云つても極最近昭和十三年の初め頃であるが、副田と、古平さん（十九回卒）と僕の三人で、外に誰も居ない官舎で、玉屋で飯を食ひながら生活して居た時期がある。

一室に集つてヘボ碁を圍みながら、誰が一番先に出征するんか、君だ、いや君だと冗談を云ひ合つたものだ。君が死んだら長文の電報を打つてやるぞと二人で盛んに君を煽がらせたものだ。だが冗談が現實になつた今日、名状し難い感慨が津の様に残る。去年の七月下旬だつた。

君は飄然と上田の僕を訪れて呉れた。その時は君は、近い中に出征するかも知れない。人間なんて何日何處で死んでも同じ事だ。呼吸をするのを止め時が即ち死んだ時だ。なんて呑氣な事を云つて居たが、すでにあの時相當の覺悟を持つて居たんだと今になつて思ふ。

當時、君は滿洲の方に就職口があつて大體決定して居たが、就職ならぬ兵隊で滿洲に行つてしまつた。俺と云ふ人間は、どうも滿洲に縁の深い人間であるかも知れない。と、出征後の手紙に書いて来た事があつたが、今にして見ればあの時の會見が今上での最後のものではあり、二人で取交した蓋が君の死出の旅路への首途を祝す乾杯であつたのだ。

あの時は君も僕も心置きなく呑んだ。そして、再會を期して別れた君だつたのだ。秋もやうやく深まりつゝ有る。さなきだに人の子の心は、病葉の一葉にさへ哀愁をそ、らんとする今日の日に、いたたまれぬ君の戦死の悲報に泣かんとは。僕も上田を去つた。昔ながらの校庭に君が居た當時と同じ様に葉が紅葉する事であらう。君の死を思ふにつけ一人心寂しきものがある。

國境からの第二信は、ハイラルの街の様子、勤務の様子、ゲイシャも居るし、カフェーもある。白系美人はチョット可愛い等と書いて寄したが、最近君が何處に居るのか音信が絶えた所だつたのに、君が僕へ、第三信、第四信を次々と書く心算だと書いて呉れた第二信が僕への最後のものとなつてしまつた。

第三信、第四信……は送つて呉れるだらうか。こんな風に同級生の中で最後に君に會つたのは僕だらう。同級生の諸君。太田、松野、巖ちゃん、松浦、金ちゃん、熊さん。君等は副田が戦死したと聞いた時、恐らく僕が驚いたと同じ様に、驚く事だらう。どうだ、無軌道ではあつたかも知れないが、あの感激の當時を想ひ起さう。

副田に對する入學當時に關係の深い人間、巖ちゃん、熊さん、僕だ。卒業當時のそれは、太田、松野君等だ。副手時代のそれは僕と松浦、君だぞ。共に副田に於ける思ひ出の泉はコンコンとして盡きないものがあるだらうと思ふ。思ひ思ひの想ひ出で、思ひ思ひの副田の在りし日の姿をしのぶのも亦副田へのせめてもの追善であるかも知れない。

同級生の諸君 彼は勇躍壯途に上つたぞ。あの十七貫を超える巨体で敵を陣臨した男らしい姿が想像出来るではないか。副田の爲に、サギルとハイドの爲に心からなる冥福を祈らう。

ノモンハンの草原に平和の光が訪れたと言ふ。遊牧の民が再び羊を追ふ姿を想ふ。副田よ、お前も随分と故郷遠くはなれた戰場の露と消え去つたナ。然しノモンハン事件が、唯單なる戦闘に終つたのではなく、本質的に幾多複雑極まる内容を含む、民族對民族、思想對思想の戦であつた事を思へば君の死は決して無駄ではない。

さばれ、僕は現在に至るも、決定的な副田の死を信する事は出来ない。眞黒に日焼した顔が、僕の眼前にヌツト現はれはしまいかと、はかない幻想に浸りながら副田の冥福を祈つて居る。

戰地通信

慰問品に對する禮狀

(校友會長、千曲會長宛)

安部 重氏より

統後諸賢には益々御勇健にて各種重要部門に御活躍遊ばされ、目撃するに御成

鈴木 中氏より

秋冷の候と相成り候處校長先生始め千曲會々員の皆々様には益々御壯健にて御

松下嘉博氏より

時下初秋の候母校千曲會には益々御盛榮之段奉慶賀候。降而小生儀御無音に打

久芳大三氏より

其の後意外に御無沙汰致しましたが御一同様には如何御慕らしてせうかと。先日

宮坂三郎氏より

嗚呼！残暑の日も吹き信濃地は爽しい私風が吹き始めた事と存じます。會員皆々

大岩 巖氏より

初秋の候校長閣下には益々御壯健の御事と拝察御喜び申上候。思ひつゝ御無沙

小柳源一氏より

八月二十三日付御芳書本日落手有難く拜讀仕りました。御先に其後御變りも

祈願祭寫眞に對する禮狀

山内末男氏より

殘暑中退の候先生には益々御壯健に互らざられ日々御由承りなす御書面を戴

先日は校長先生の激励の御言葉を戴き且其の上に、心からなる慰問品を澤山に

秋風訪れ誠に暮しよくなりました。校長先生を始め皆様益々御健勝にわたらせられ御過しとの事お喜び申上ります。平

母袋忠右衛門氏より

戦線に於ける三回目を秋を迎へました校長先生を始め、母校の皆々様には御變りなく御過しの事と御察し申上ります。

福永雄三氏より

先日は校長先生の激励の御言葉を戴き且其の上に、心からなる慰問品を澤山に

神崎閣一氏より
初秋の候益々御隆盛の段奉賀上候。陳者本日不計も母校出征將士武運長久祈願の御寫眞送附被下深く感銘致候。幸ひ私事病狀日々快方に向ひ居り候間、又立つ日を御期待被下何卒御心安を御願申上げ候。先は右不致取御禮申上候。(九月廿日)

根岸市郎氏より
統後學生を御統率せられて教育の傍戦時下學生の精神總動員に又戦線にある我々に對しては御激勵御鞭撻御慰問等、等しく我等の感謝感激致し居る次第であります。前便にて申上げましたる如く今我々は丁度〇〇中にて愈々明日よりは敵と遭遇を獲期致す地帯に入りませ。本日、九月十二日附御書並びに別封祈願祭寫眞一枚確かに落手仕りました。取急ぎ着便御通知迄。(九月二十三日)

梅村義一氏より
故國は既に秋の候貴會各位様には益々御健勝の御事と拜察仕り奉賀候。降而小生儀絶へて御無沙汰仕り居り候に申罪次方も無之候。校長先生及母校内外の模様につきては毎度御惠賜賜り居る千曲時報により承知仕り其の無限の御發展に驚歎致し居候。扱て此の度は千曲會及校友會合同にて盛大なる武運長久祈願祭を御執行相成り尙其の寫眞を御惠賜賜り過日損傷無く入手仕り拜見仕り候。全寫眞を拜見する毎に母校各位の熱誠なる御後援に眼頭の熱くなるのを覺え尙又在校當時の事共偲ばれ懐昔の情禁じ得ず候。次に數々の讃辭と共に御書賜り萬辭に不堪尙一面願ひて汗顔の至りに不堪候。小生出征以來滿二ヶ年余、北支、中南支へと轉戦し参り候も未だに何等の功も無奉公致し居るのみに御座候。然るに統後各位よりは格別の御高配を添けなくし筆紙に現す御禮の言葉も無之候。事變發生後の教育方面は著しい緊張と飛躍を示し將に時代の動向を示す指針の感有之候。小生目下次々に入り来る補充員教育に従事致居候が、軍隊教育と學校教育とは別付に理由も存じない程類似點多くなりたる如く感ぜられ候、小生尙南支に在ること己に十ヶ月余り廢墟と化したとし廣東も己に八分回復興致し民生は安居樂業致居候。和平救國運動は先づ南支よりと乗り出した汪兆銘氏も己に中央に出て活躍を續行され居候。下級乍ら將校列に加はる小生愈々長期御奉公の覺悟を以て微力乍ら尙一層努力致す所存に就き何卒今後共宜しく御教導賜り度願上候敬具。(九月廿三日)

會員動靜 (十一月四日)

- 片岡 綾雄 (現職)
後藤 幸一 (職)
小山田啓三 (職)
尾崎 利雄 (職)
加藤 省三 (職)
赤羽 是壽 (職)
香山 謙 (職)
探本 優 (職)
中島 正喜 (職)
多田 作造 (職)
淺川 茂樹 (職)
關 博夫 (職)
横澤 正雄 (職)
木内 庸一 (職)
北原 幸治 (職)
後藤富次郎 (職)
湯淺 長輝 (職)
芝崎 龍三 (職)
井谷 信一 (職)
夏井 範一 (職)
大根田 五郎 (職)
淺井 春夫 (職)
小山田道男 (職)
須永 茂 (職)
石井 清六 (職)
小川 茂治 (職)
進野 精生 (職)
塚田 和磨 (職)
宮尾三右衛門 (職)
小林忠十郎 (職)
岡 亨四郎 (職)
長谷川任三 (職)
佐藤 一郎 (職)
矢澤 登 (職)
平野 庄一 (職)
鶴岡 要三 (職)
下田 統夫 (職)
牧野 久 (職)
兒玉 光子 (職)
小川 みよ (職)
田中 市江 (職)
相馬 夏子 (職)
石井よしゐ (職)

編輯室より

例年よりも暖かい氣持のよい秋に恵まれて運動會、查閱、演習等野外行事が順調に終り校舎に漂ふ空気がぐつと落着いて、學生は勉學に本格的になつた。
△：暮れ易い秋の日、校友會各運動部の體育クラスマツチに興じて、今年度の體力鍛練と、熱血發散の結末を附けんとする若人の歡聲が快くこだましてゐる。
△：吾々の重要な職途である纖維界の尖端を行く纖維化學の日進月歩は吾々の常によりたい所、第一面與正巳教授の「纖維化學界最近の動向に就て」が之を充分満足させてくれる。
△：本時報の内容、體裁に就いては時折御注言を頂くのであるが、今度も會員に對して指導的な學問の記事を、と言ふ御註文があつた。元より編輯部の主力を注いでゐる所であるが、已に指導的學識を持つ會員の奮發にも待つ所大にして、各位の自發的投稿を切に願ふ次第である。
△：本紙の體裁に就ては從來から刷誌型が希望されてゐたが種々な事情から延びづつになつてゐた。會員相互の力で出来るものが其の希望するものにならなかつたと言ふのはおかしな事であるが、之は何か不足するものがあるからで、夫を何とか補つて四六倍判と言ふ型に近く實現したいが如何なものか。

農業藥品 化粧用品
純良藥品 寫真材料
三共農業藥品ウズスルン
東信代理店
上田市海野町
合資會社 河合商會
電話 (海野町營業部) 二七 八一五

信濃教育品株式會社
サトウ商店
東京本店 電話日本橋(六)六六番
長野支店 電話二七三四番
篠ノ井支店 電話一四一四番
上田支店 電話五七三番
松本支店 電話五七三番